





1272
5

河海竹卷第五

十六奏

卷五

正六位上物語博士源惟良撰



りりやや人々がまもひよけゆくのよしむかう
せんがんくわらうもんのうくわうもと二の
相臺灣の佐とまを日本と
長治う傳ふる年大元海えだる還なる玄宗ぬ太上
皇

うかともおうつるとのケモヒトツモ林にしふりや
ウキスレキう木人ぐでうつて
秋とアヒトモアシヒトモササハのあしやうる
えらあり、あつま、こえつもあら

原氏秦漢大將軍

天平計後元年、近秀行平城にて
廿二日没。子秀^{大納言}_{（稱男）}の右京
内麻内麻のたとすもあらぬ没
中宗入ねぬ上田村麻の木と傳わる

多忙の事に付
以本寫

太乙府
太乙府
太乙府
太乙府
太乙府

卷之三

中井の

名僧有真者也
大中後弘曇
大中後弘曇

右原是公
去下是勇
有尔雄友

卷之三

內閣

卷之三

卷之三

九
卷

三
萬
庫
綿

廣雅

花在花里
原上行

卷之二

太尉司馬公
憲師捕男

卷之二

あらわしやまゆみかねむ

家、申未宜六耳。天正十六年秋八月、參之委官毛

卷之三

壬午年正月廿二日
金仁天官竹立年
丙子月乙卯日
敬祝壽誕宜奉祝
敬候賜福

四十五歲上元

景行天皇

庚刀令皇女
九
年

井の事は、
天皇弘仁元年、
内大臣・
母文節
の齊王を、
爲り位（がく）が
しまつて、
齊王也。

かくはんのうじ
かくはんのうじ

卷之二

早紀本紀

詩集

トアリヤヌイセシテスルモノトコトニシテ
ハシタレバ後方のまゝ狂行ト勸

新院は詔ちぬか無行下勅

年中行幸之月中午向午行幸奉之未向例
次二日行幸所由午卒皇陽寮及伏事法司前
行幸院元之御行幸人奉之南止不至卿家及
山城とい不圓牛法被之乞被不作行牛也山城と
行幸不作參日向用之又號行幸不陪臣之復者

カハラ
仁佐天皇卷

まわるにれどもさういふ事は
紀貫之の門人相國寺の口會序云
まわるすゆく
ねりらをかへあひめ
いみりてのまゝと人のたゞと思ふよ
あひよくやく人よつてうたふとお
りのよき歌ふと云ふあきみケル
千秋のよき歌ふと云ふあきみケル

今たゞまのもの

人馬車火之
皆死多在

清め納みれ

清が納みれまゆにまのりへ東八人奉ひ
わちくとすとくも二年
者、女房奉ふと相ふとあら年餘九

卷之三

行はれの半
行はれの半

ぬれのあふぎをうそも
いわゆる

九松庵社の文書

九經圖之說

はくはくのまゝに
あらわすよし

うるふ士の

卷之三

まくらとおもて

とおののくに

行在所居之右近
有行宮也。其事
行在所居之右近

此の如きは既に監司の手に渡つてゐる。

是の事は、
おまかせ

卷之三

松齋にさへも
今りよ

2
後始望之有如也實也

江戸のうきよめを、僕は一員ある日行つたまことに

沈以小佐其子
子之

木もういふへあつまつて
まどり

子之臣風小人臣草上風如傳論

行風子
如東壁文選

وَمِنْهُمْ مَنْ يَرْجُوا
أَنْ يُؤْتَوْهُنَا

内之尤多也

وَلِلّٰهِ الْحُكْمُ وَالْحُكْمُ يَنْهَا

市女之子也。中
古者，人臣之子
皆不得立。故曰：

あやしめ物のとくにくりといふあてついた
くすりあはれも

大後三條院より行まひ興入ましのれ
田舎鬼鬼民百姓も神仏りを小額りよ
トあらせくらうたくまうりあり

ふるりうし並木と

温孝子舊物あてうれぢまくらで
おまきのえふるりよをさ木のほりふ

と仰あく

とくましはト宣不凡く除の体不凡ゆれば
うり神りにほりんせりう本とみ、資本ゆゑと
吉坂树と日代紀よけりと延太神あまのいえ
とくらむれに、百石神を天皇奥山ノ坂樹

もて、のと御り神の御本と林蛇が字
本物也とお眼本とぞ

とくらむれをうく内とくせり

脇惣士

推古天皇十二年歲次甲子四月成午朝詔用唐

うきじゆうれりよふとくせり

ほ緑陵の碑とやつの碑也あ葉あくけり
けりうきらひうりそへまくさの

みくまれ奥乞小海ねと角也

しまのがくれ形よしてうづひく

たとる場扇をとく

左邊の傷をあ潤院を追ひ傷一奈入ま

う扇つまむりて

松扇也

あらの中小をあらむ

さう切れ一劫

かうけりをあふむりやまうらへよ

あひく

ハタシトゾの百姓のわざをほんすよがまうる
守へねりはて百姓ともりべつはづのねの多き
八十石とも八日行ともいふ事ある也

不桃

あくもとみゆゑ小人をすひくすへり

四下り

けりすもあられじりまへ

便嬖ビケイのむれりすもあらじるへ

汝み的スミテくちめのねにとすわけまうらへ

今川のけりかせ小

夙礼女至抜深疾病没^ハ故以^ヒ御除^ム

こゝに後^ハの事也大嘗^ヒ云々の御^ハよのやま

也^ハ豊^ヒゆくすらも來^ハる餘力とかすり

後^ハ行^ハきしてとくへこまつといつて

もの宋^ヒすすまうつて^ハのゆ

化^ハ窮鬼^ハ故^ハ調^ム人^ハまつり

四^ハ化^ハなま^ハすすみすすみ^ハうるを^ハかわ^ハうり^ハ御^ム

卷之三

大林寺中見孟東野
仙軒子與之同宿
夜半聞鈞天樂
不知身是夢中人

かの井の水もさうありてある

波のうねりの神のうねり

彼のうへは不思議な事あつた

神
天
地
人
物

れらの靈

五國之兵
平定之日
必有大功

一
七

力於

樹の根本といふ

西
之
物

あらゆる種類の酒類を販売する
日本酒専門店

小入酒入酒是九月
休矣莫往近

卷之三

敏草天皇、年波布羽羅付三毛得

多羅古天皇御聖佐多延都御事モ原小野姓
ケリミシヤハシマツカウタモトヒトヘアラモ
ケリキ佐ガサモアラルトヨムクテヒミシヒセ
エイシタモタタモモニ御シシヒムカムシヒセ

ムクスナムクミ

義主わあも長えひ日セラヌ端天主庄モ先御師

ハモトモトモトモトモトモトモトモトモトモト

松家行秋、阿護磨小卒モ櫛半うのち名避
れれえ

ムクスナムク

斐あく事也、津津事也、斐也はとす

故のつまうあくきわく

春の深月、跡どどひれと京宿としむじのと
ケ宿とせり、ケ宿とが四の守外極月かりて
を也あくややくやうや京宿とへ京よあく行けと
海のとほぞくをなうづまう、レはもり人浮子
不トウく住宿とまつあらう、少アリテキの深月
天主もアの三月始

トのくりくりれきのゆすありく

以當や宿、いれ

えきうづけすゆどりうて

勧

猶若

る年

アモトモトモトモトモトモトモトモトモトモト

アモトモトモトモトモトモトモトモトモトモト

ムクスナムクミ

人云ソノ事上本丸も亦御内次の儀トモアキ
テ原と少く有り
に多くは少く多くありましも多き事の如クレ
たゞ一いあくそ皆あね、よ
ナウク、納カニシ、レ、ウジ、すきん丸史の服、ま、服
しり、江、寝、ノ、タ、キ、丸物、乞、今、夫、若、准、文、母、服、也、日、服
一年、嫡子、生、放、一、志、あ、ふ、ニ、五、時、ま、勿、免、
は、家、三、昧、善、貲、大、ち、う、り、行、つ、
は、家、三、昧、心、焉、貯、弃、ひ、は、天、々、み、伊、須、悔、過、云、南、
け、ち、三、昧、善、貯、れ、又、大、唐、ゆ、佐、向、れ、詞、小、も、け、ふ、
三、昧、善、貯、弃、之、文、向、云、大、湯、博、弃、の、大、士、亦、曰、用、
大、土、曰、弃、

勝也右方病めり節物又榮もけふ等也
又主貞也又異

肇嘗上之珠推乞年丹
與人十肆也才九
中上昇胡

秋至入柳紅葉

事。上之主陳と勘印被曰内并室中より駆へひる
人奉手式廢上ナ而日後空扇立位在人の勅史
事。

立候人等をまわと奉二人御
以義を位候人催遣ニ三車牛糞内竹籠人下ま
班次入の節主一の入の神司儀

よりうきひまよりよ

嚴主祭司

口念候あらうまへ

川村にほれんと神とれ

可とあまた神もひつてむり

口主とあせ松やへようくまうどしよれ

風のち力めとあまめり

吹きをかきとあせ松風ともすゆとくまう水
もの布キハラねはあとひりぬとくまく
まうねは白毛とあとひりぬとくまく
たひけいわあくいの紙絆と系のまく

かくとつれとあと高宗とくの神と萬と翁

しのの、うれん

かづめりもとよがりへらんせととくまく

けのとだりと無きもとあと神事され、釋不

のえとねうとひんせとくまく

乞ふとめりあとくまくとくまくとくまく

鬼とはやくめりめり

節主のうみののくわと

野主の際のやまと

ほのとくあまと正日までうめくとめく

正日はて十九日のとくとくまとくまとくまとく

のくまとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

服を支取事百十手の十二月の常薨後え年
支を以て字は用ひて支取後毛支装未了服行
至例將服又衣勿縫之経往て云服と立た夜着事
云其守官不也於官へ故なり家人云西夷領先

方の服うるをえうどくけられ十月の支取姪

妹の服うるをえうどくけられ同義兄弟姪妹服

日三月

葬合

宋玉の唐賊に赤帝に李子名稱非未行而亡封
于巫山之臺不得巫山之女も唐ノ帝且馬行す當
の行氣明し言ふ陽を下

有不善ニテ

庚金桂冲初見可

劉三月

如達れ失事勿復
邪淫蠱々烟氣微

不無長立漢陽邊

劉禹錫婦レムノク作詩之

えりいよと二二海公、わづか、支度小

源氏主婦つまむしり、服をうづきうづ

二まや、濃すこありて、多也

行丈ナ嘉端子生焉也服サ日服一年を乞令

久々りそしりも

苦痛

加賀下人トモサウサウナラフチ、テヨのさきうづく

十月ノリヨニシカドリスノセシルアモト
拾

冬ナレナカムモアルモシレジト、うつむキハキ

シハシリテヤコラセマツルヒキシテ

大丈一タ季と妻としはひりやうらをもん

氏りつすり

まづくせよあくたよこえしりきわさすてと
文選寡婦賦云本庶系而彌ね作神宇と夢
に曉て夜に歎く返ぬ悲れ宴渴す遊猶存於

狂葉文

このもれよりわれ

けやくのとおとし御すりもの

えれきーたらへかく

純き唐風より

ゆりと可るすあり

神背つて可るすありとが神の仰わさりま

むららふと萬年りあらかずえやとく

白きうなまくらしおれぬはうふじてひきり轟

はうをけすれりと夫田とうれりそのうきり

いとくわいりす

くまくくえもに神からすへる

もとまのとおれそくはくまね事ノやまく

あく

紫日記上をつほの上童、じゑあくすくくらし

くすふまいたつまくらすくま

くまくまく大まくわれり

黒行放 章草色 ひのまくらくまくま

すくまくまくまくまくまくまくまくまく

うせじしやまくまくまく

がれまのと

やうせ

かのつてやれ いへ貰ひ

うきもくあらへとぬたまくとゆ

坐る參る氣冷君衣す因札故食詔年

志の衣さうやあふじゆ

ひづれう重より 王事とわしやけ牛常留連
那曲今とあとをまとほく高たの事はりとおれ
主は車乗す例之けや居中も左わ軍事事
初秋とあらかとす御滋々と浦さり又アキ納
えの和漢韻律集ノリ りゆえ古集もらと
文字とほく入ノキ事あり又遙連昌文賊も
獲為危偏懷す林を林風とゆくと相あ
り又不ちゆす是祥角と櫻門とあくと
ふ毛禪角と改めり是ホの例

馬事きよみ

あれくわがの物ととのとつまよせのと
主文のうのうししきのゆくえいまきゆく
れやつります

主文にキ復終下落を充服と生禪日

かの升とく下だとひる

居前也

夜のひうひ

十月更衣の聲未

ひつとくのをりお

毛約曰 露宿把食与禪

は食詔

通詔曰

おと寝夜長一月五年

自孔當曰今被

又口文練双聲參考裁の食歎被號參照被號參文常

有口者附詔曰被と二年在胡越之

四年平紀曰高皇亥露垂之主本追食度も里法

食えり是
お食いはくすす中すあり
うふうれむわうおへ内本家の母儀なまく

所例也

續日お化白賜立位のとて食及衣

少名しまひう／＼

難解

井のものもく井

祥月

満集

四十月

亥日

作餅食

令人

を病

掌中磨の良子解七種精

研

至小室

有

體

物

これうち井がわす

よ不ぞき

身よあくわ

とのくわよまつせ

まよ解

もと三

大餅

もと一

うすす

わあてとき

き口と

ま日と

ま

ゆ

まよ次日

もと

雅之

あらわ

う

くわれぬ日にはあくわん

う

う

う

う

三日來餅三

一束

本

事

う

一祝三日來餅と去年の取と酒とす

ま

ま

ま

ま

てうき十

どは西く

その余

くわ

くわ

三うとい

うい

うい

うい

うい

うい

うい

うい

うい

うい

紫檀

萬

善

通

うい

狼小黒三

向

うい

うい

うい

威

うい

うい

うい

うい

詔

うい

うい

うい

うい

せく所あり。小物也。

火のすら井ぐるに付けよし。

は餅又右引也。

いへりくとてもまつてらむ。

伊鳴物語。首男あり。女也。向手の左
ノ年とくよひわたり。まづかうしてゆき

くさきよまづか

くわいく乞つて
かのよこと一叶。わら

高童便。或高粉。

高童便。所より。調度也。入法高粉。

土記曰。高粉。南二階一御上。五火丸湯汁。不

中添。童便。下。五研便。一合。主食。

次立唐櫛便。

次後毫。

仰立一脚。並一阿子二御。其上東。並櫛便。一双。下

立高童便。西墨葉子便。共下。並車便。

一祝云。高粉。并丸。高通のよ。こは阿子。ちつ

きがねり。或淡糸。或白粉。或淡糸。或白粉。或淡糸。或

白粉。或白粉。或淡糸。或白粉。或淡糸。或白粉。或淡糸。

よ。お。一石。高粉。並。と。之。

え。ス。ニ。タ。シ。テ。モ。高粉。ア。サ。

近倉。近。

衣笠。卷。の。中。小。入。之。

小舟たまごのんくりとてやくでさんわり
うるわしき

新色毛糸井川引きに口業には新麻とよ

升つりゆわとしり

わらまで升たまごとゆきもとて來してとくふ

（主役を）あけとの

やけくじを（）たまごは

折浦曰殿壇若者を志轉りとは是名殿壇志轉
も若者を人情所集善は深滅惡はあげ事中
有力者為志轉淺漫力有天王光ぬ日月若ふ
徳所集善は深滅惡はあえ志轉之方支配
酒取ぬ鍼鬼修所善深歎名志轉耳 事足
文支志轉く

（主役を）是傳頌法芳すと大照也是主志轉と言及
主役の（）いがれとくわらひとくもと
（）わらひとくもと

（）わらひとくもと成安たと（）やうとくもと
（）わらひとくもと成安たと（）やうとくもと
（）わらひとくもと成安たと（）やうとくもと
（）わらひとくもと成安たと（）やうとくもと

抱琴 番衣 田代 神荷 里 补衣

礼賀 男子不同抱板

今宋奏上ひ生地阿ハ革未因板が多きは

力七賢本

いはよる思ひぬ
ゆきのくわらひ
園林^{院林}のあかよ
いすうとこ

也あれどもうきく者ありまじ
にゆきぬるもん
かくのうふのうとひくにねむりをす
おまかせや歎子或氣で言ひの歎子母眞佐子
形年年あめまみ海京入
は天慶二年十二月入内向三月の女女生母子室
は母子爲称主方の伊賀叶母子御故わく行換け
例延吉延吉と代半代半され
之れが物語し古事記古事記のせうそ

野よりぬけて流九月を
九川をまほ
夜よしの月に
月のあまう事也

御子のうれしをす。かづ
或説は本とひぬく。ま
之はつまぢく本とひぬく
うふかに任天皇の御

大橋左近
火炉
順松
助舎

重連
四年
御墨
印記

うそだよ。うてうかがつくる。

かくのうにあらわす

5 R. H. D. 2010
2010
2010

らりやあせり
かくはんのうめ
まのうへ

まへお直に
おもむき
おもむき
おもむき
おもむき

あらわすにあらわすにあらわすにあらわすに

よもぎをかりわらすもとマツのまえ

木の根をもつて
木の根をもつて

白葉、辛野、伊勢の三姓のうち小林家が

て多ううたう
晴のちよ四
うれ

よしゆよしやとおのせうまきよとんりだより
なまくまくいととくとゆふとあまはせうるお
もちがれふ一及新販

十六日ひろてあひのりきつばゆまくらすまく
長年馬鹿

天曆四月六日よりある内に長を送りしてゆ
てうへんと申納をおま

かげまくと一まくよそ
五けまくとか一あれいまくよそ
ゆよつもくうり神アマツシマツ

復命望乞ア社天日祝神送本綿若アマツシマツ
東本綿アマツシマツ十二枚安藝本綿アマツシマツ四枚

あれくわくとくつり神アマツシマツと申すとくわくや、
内木業アマツシマツよゆてけてたまよう神アマツシマツよゆくわく
金ゆくうくつみ神アマツシマツとくわくへつめあへつめあくのゆくとくわく
伊安無アマツシマツえき度アマツシマツハ淡河アマツシマツの肥臺アマツシマツ所度故曰淡道
川アマツシマツ即謂吾取アマツシマツ也次生伊子二名アマツシマツ次生源流アマツシマツ次生源流アマツシマツ次生大日
本豐アマツシマツ本津アマツシマツ固アマツシマツ是不生謂大八アマツシマツ矣

想度大八アマツシマツ次六小アマツシマツ合十アマツシマツ御其まアマツシマツ小得管見

支の返行アマツシマツキテシラウエヌク

うるわよ上アマツシマツの返行アマツシマツ高アマツシマツヒテアリ日本
モタムアヒム江アマツシマツと申給アマツシマツ又別アマツシマツ申江アマツシマツと申
給アマツシマツトモ申給アマツシマツ江アマツシマツ付アマツシマツナリ申江アマツシマツと申

別あつまひつりとこうくまめのうかねこ仍あ
とくへんむらうまえをね源氏のうよあしのがの中
とくづれとけふをめぐらすやたゞとあるレ
がるくさきといづからり又見わや／＼ゆとか
くうと源氏あの方／＼ゆゑをそらすえもそえ不^ハ
もやとお／＼きいのつきせぬ事とときつてほてり
りもよきてうけりやとくまくやもえうつまと
もゆくらりあめくらかげくとくがまきあまと
秋えのうりくらはすの秋えのうく
うやと不つゝよのうりぬくふけあてそらゆくう
まうるおどりふりりくふく／＼ゆきくよくう
ゆあくさぬ

集詩

せ徒え志平へ引いたせあがのうと不そそ不そせ

一うにがふの位とまくもおうすすうりや／＼ゆ

ま宗末藏始送へす十六今六十上

ゆきまくとくゆ

ゆきまくとくゆきまくとくゆ
じ是ひいまきんく文書義れのと多用く
いほの儀もれ

ゆきまくとくゆきまくとくゆ

御主の輿居本ゑつて解質本ホー係石自共門
自大板屋小西東戸下のせ西岸木之下自东解川つ
ね半不よ半と主上布治格六令高も擧多納清
ち後毎り至節輿居本ゑつて解質本も自大板屋东
戸辛興も解川つおもあ付質本も解也又示

帳幕中入帳アカ阿姫人墨檀與シロ白河は皆曰
件帳丈上裏紙入矣已シテ此之亦王宿帳内度
不直シテ也故シテ齋全氏記

行支初行儀ヒツキ上之書シテ

西の御儀ミツル入内行野文傳常裏内シテ早且向
八省ハチジヨウ

上之奏宣令事モ御南處シテ恒シテ宗興判大極處
後序上以シテ以義人奏シテ書并使主申御馬シテ返
而宣命其次可シテ御シテ旨シテ之シテ興事シテ焉シテ有シテ

行車并付シテ五位羣人奏シテ

付御シテより

以シテの陪膳立位羣人シテ役送

主上シテ大極處六位羣人シテ易式并承シテ觀帳官
以シテ五位羣人シテ付御シテ尚

仰而シテ不立位羣人シテ役并主シテ奉入シテ始シテ立位羣人シテ合案
以シテ行シテ或行シテ并主シテ入シテ更シテ行

主上シテ觀帳官

以シテ五位羣人シテ執シテ付内シテ役

還支シテ恒

ソヤニテシテあたるシテ一車シテより

八省ハチジヨウ勢式取シテ戶民取シテ形門シテ不差シテ支內シテ省

恭正シテ天皇大化二年二月シテ行シテ奉

さく本シテ行シテく

西の東安シテ主シテよこよこシテにシテと
北の海シテのらしシテ漁シテいシテとシテもシテいシテ行シテひづシテよ

さくらの木

す、うりアセのたまごをくわふ
あつね、あつも併せ
モトウカニシタリテシモアラム
スル日セキアリ

おまかせ申す。おまかせ申す。おまかせ申す。

人より此の事に今まどもあ
るまを一ひかめりか
うか従くやといふ
てはとてはせぬアムルの
アヒトシテアムルのア
ヒトシテアムルのア

せぬとの復讐の意、かくもあらすじは、
くも後づひの時、おもてまつり
て、おまかせすまつた。里に
むかへりて、うなだれて

羅事
湯汝
吳公
方言

御衣を身に附け、腰元も身に附け、右の
はんてきの布の上着服用布(じゆふ)、主(おも)
易月(えつげつ)とナラテ(ならべて)今脱(ぬぐ)て又裁(さげ)麻(ま)
布(ぬの)と用(もち)い僧(そう)の毛(け)と(け)着(き)衣(ぎ)と
四丈(よんじやう)の天室(あまむろ)を七(しち)の廿(にじ)月(つき)未(みだら)く天室(あまむろ)

以彼幼拂多色及屏風
也通至用正深細布
是十九日未之女而之
子之子之子之子之子之
子之子之子之子之子之
子之子之子之子之子之

伊賀の事は
不思議の事
の事だらけ
だらけだらけ

史記
卷之二十一
留侯論

かくひわまみね
木の葉をもつて
はなびらぬれ
たる物語を
うひまのへ
小萬國を
うせむるよ
あらわす
はな

モチハシヌアズレタニウ

林間故棲何處靜柳似舞懷池似鏡

集之也。清九其九年以治。自之对帝子界化之。
毛為多采。同之。山同也。少智同也。毛也。

江原
まつわら
あやめ
かくし
かくし

家にまわせてへひん

きのれ、かくらふなりまつりゆき
ゆよじようとくにこまくらひくら
もんじゆきとくはよもん

梅毒
凝紅亭

弘微

אָמֵן וְאָמֵן וְאָמֵן וְאָמֵן וְאָמֵן

卷之三

之傳也。右オ
カモのアリ、
ウツクシイ
ウタニキ、
ハシム
トモテ

卷之三

真子内親

淨得些方圓無缺

三

つとほりゆいにんたんとあまむらうすま
わくもりますらふとのさひいもゆくすま
くはきる。／＼まぬく

簾うつぐくすま。／＼わく

史記曰孝惠高人仁弱

そんのうとく。又增内侍不動大威法は連
あさよもとく。又人軍事金野金野夜叉し
伊豫あやにうちく。又人金野夜叉し
たく。又人金野夜叉し

と唐宋往事也

又やうりよろてうれん風そりくまけくま
ねきくかくへが、とおそくわくねまく

とねのうふえくうすと唐司けもよくわく

くわくとく

あわるのせの友ねんとまくとくとい

とくきあくはく月のえと、とすまくわくくわく
世迷一事持政及弘道殿夷舍の高べてあくア
あり冠くつ修くつ活くつ活あきは活くりく
でこくとく

のりふともとてのまぎくわくも勞なすくま
伊豫物語えこれひこくはん林はんらんやおと
仏とやあめをひやまほりのまくらゆくりつ、
くはわくわくちくはくわくもり、お待まは陽ひん
のまくらゆくりつ、お待まは陽ひん
まくらゆくりつ、お待まは陽ひん

あせややく川にさへの候計うもすと奴まよひ

こひくうひきあれ

わうふとまとうて

同地能と未だえりわらかをいづ

蝶附

うるあねいうきとゆうとゆう

世をむかひぬとまほりつておのめあひみよし

或郭うやくや

朱或ア見化よ大或アリノ殿代主ちうり

とてゆり

トサハキレマリ

高可磨毛也天安僧二間護の僧

すくれきよ

四月く隊不殊生服

うつはくよゆてゆう

雪林院にぞひくれ夜のちうすれとゆくとゆく

つゆ極わきとらりうとくさくわくとく

雪林院は傳代の難まゆり仁ぬ天王

まつり次第一康親と傳外を堂に徳報を堂に

ほひれもとて天層より實性僧妙利焉祐也

きうてほそ敬ありき内記とも卒するもの報

吉左靈院ミ文通正ニ康保元年二月十六日補雪

林院が高よ叶奈清伝ゆ往上

天層セニ五月十九日お雪林院令傳大般若又康保

年五月十九日始後じゆあま言院東る雪林院甚矣

也實なる傳行玉經源サケ口竟之為是矣之づと

あり小石丸玄之元は某年春新承雪林院

むうきノトモホアリてらふくうのく月を

やまと戸とひぬまの九月
念仏事も折取る様じらふて
一トえぬ通照十方也
あらわの爲めに身も心も
きづぬり、身も心も
と東つ見る中まゝまうけつう
や

一
降元御宇

あらうの處へり。わがそぞらをうか
あはれの風とらまく。ねじてといへるときつてはあら
森はいふ野也。仍研えよらまきと
いたぐれ。木綿と被よどきと
古絹格を。ひ草菖蒲カナヘ。あらは無スナトとつて
男の年紀え。天馬山。日暮縣カムイ。む絶美

じつと思ひもいふ
つかのあはれもまことにかゝる者今よがんとく
らきせふゆめ

染く見る
きよしのう
おそれと鳥

江口家集

六十九
三十角
三十人
三十日
三十日

卷之十
天子之書三十卷
初者之師作
末者三十卷

中右記三十卷後一年又八月廿四日

六十卷行例

二六とかのとよあやあさあらする人とも
は木板へ木のまきあつてやうのをと本のまくわくとよ
一祝歌古人年老をとよりせ 河原流や波聲かく老入
くろまくらまの内小 服を車也 板車すとよる
翁のつよ 集毛毛 ち庭 豊 五葉 裳
とくらひのまゆるきもくらむ思ひれど
がくとくとくわくじの家下りばかきみそり
がくとくとくわくじの家下りばかきみそり
大主乃のゆかの大納毛いにひ弁とよ
内肥 美毛 股同口 股毛
一股毛也 但け地語中内股すとよ先オトケが
つる年あづれ

まいまいさん 麟景殿

スコトロトウのありとつ ひらたりに
漢書曰菊軒幕森丹之毛 有東秦王共精微上感
於天乃向む貴國太子畏之
注曰漢書子蔚云貴竹屬之
虹蜺毛螭龍の蔽寒政立草下婚戚千羽毛ふ
充悟ね観貫日

壁木す丹う始皇とかじりんとせふ生源氏レ
たゞくわくとせ経か、日本は有利と角一
玉すと人へとしりとけの多幸也
か病やくふと人へてらまほもと人々のうりりと
かふれとものうきりと
ねずみすねお物くわくとせふとせふとせふと
志と月ひにいじらしきとせふとせふとせふ

物語天皇えの後玉忌御在原仰詠

たゞれらくゆいとらすれり

玉軸 玄紙 紗 転黄文書也

転黄とい卷わへけんかとてよ拂としく
角りとげくに結とつあしはせゆうそ
と書移ふと納ゆ

テミシラヘニ血面

様薪及藁廻道河添敷ちは衣被
は衣被と被ふるはれまくはくはくもえ
四そじととぬくわらはあくからむけり
伊陽物語田毛ハタモツハつねりきりそ
河の内をよきすとすまわづりけりんせせ
安祥寺毛のまくお用たまくあつさる

とれらもあけりあつとこけくの内をよき
と本も松りはまくたれよたくぬまはひ
もほくは堂のあすくうれつて、れやアよき

ケキリ
ひりすりくこととけゆき

文武年

よがれらくゆいとらすれり

惠乞僧紹信居候川号横川僧那

くのゆあらそとよるのまく

黒方

ひえんをうけまくはせ

内宮ある唐大、宗之舊風雲候誠天皇弘仁三年す
神泉苑観衣樹命文賊約乞姓之

延喜二年正月廿日紀えた太臣令吉根相臣奏之

物無事候寢寢主を内寓多用仁秀殿に摩
内寓可仁秀殿ミサ日差人及不可蒙未仁
秀殿

差人或清涼記を今日注向大二三シ方否子日便
用之新儀或云情内寓事半あ一日差人不難乞
少下并所司安未仁秀殿立察立察不參東
庭を伎アマハル秋王才未仕ゆり一年し松文益
公事作令向作一集文シ不而日涉仁秀殿
ケヤヒタニシの

クアヒリ小思アリ
あとよけしりぞ

十席祿云五月七日有向の性以白ぬナ天ミ

向於地至向る是白見白の即ち中於室
をちふ奉へ里世記云高辛氏シ子以五月七日
恒登东山愈王夜人と列焉シ七之謂高陽
之宋馬乞主湯高シ主是山幽考万物シ所
人主シ居七乞七解シ清徹陽氣シ溫岐也主
龜六月正月シ天皇御楊柳シ安殿沒寫
五位以上内殿高遊吉御馬無故有進立候上
蒙也中納之石上物シ進祝假位宣命シ謂零
詔今日言者之對シ少食シ左見以足シ是尔シ養也シ
主る見傳退シ承和元年正月吉日御豐樂殿
燒香助湯氣

貞觀十四年正月廿日正節シ九月大后崩シ喪中
也右大太馬寮御馬於内殿シ覽輿人シ

白る年中文書

檀祀ムカシ 白る年中文書内祿於寮宿

古今もかつ角きゆくゆく

一人高すを

ウミハクタニタキラクとあとモシヤムリ

ウのミネトロウトモシラクノ被

玉純 紫施すちぢみを家服

ミナウタニモハクスヒ

ミナウタニモハクスヒのうきの秋サニテクサ

アキタニモハクスヒ成ミ植之六作植ハラヨシタリ

アキタニモハクスヒアリケレリドヘス

序客述臘將舒柳山意留寒欲故梅桔

柳能情サクアツモハクスヒ風よほく宋

か人柳と漢古帝國中奇人柳百厭起とさり

じてモハクスヒのいやふくらシテクサ

事本末くねくねシテクサ

クハクル 以封 太上天皇ニモアヌミ文名子若戸

たれびくとも不アキタニモハクスヒセアリ

角也くも御アリテテラノ(うたこ)モアリ

七十老歎仕懸其不仕車 老往

尚書注曰伊尹既沒仕老歎以二公ノ礼葬之

正義曰伊尹湯之上位爲三公而封の因也く又

史記于歲内告老歎政事お志欲ぬ也自物

礼記曰達其仕仕可即而深重

漢承以車賈地節三年以老病乞罷承以泣官

乞始 資親政事曰玄齡自以一居端揆十五五年

頬敷辞位優補之許十五の進封司室玄齡
少の光清公仕

奉明例

孝謙天皇天平勝宝、一二月日正一位行左大臣構
御後詔見政仕辭大臣大臣
在原良世寛平、一〇七月十六日任左大臣
十二月廿九日上表政仕不許幸号公仕大臣昌泰三年
十一月八日薨死幸、

執政後泣仕例

魚住云、元嘉二年十月十九日病上表乞政仕勅行政事大臣等ノ方
東三条用白以故 宽平二年七月十六日辭不臣泣仕

承補 一二月廿九日上表政仕大臣行政事

栗原泣仕詔辭宿行政事、あづまレニ也

は政仕の准授左大臣難儀アシガタ仍公爲源氏難儀アシガタ
醍醐天皇アマテラスノミコト代政仕良世ヨシハシ之シ之シ也モ行政後泣仕例
ノアシガタとアシガタ政之变ハシナガタ之シ事モノ難儀アシガタあり

延喜、一二月九日庚戌拂記曰右大臣行政事大臣補

大行長行物后言政仕表依詔許之

ひだりのく 一跡

壬午の清淨

ウヘキ

掩韵

右清の韻字アシガタかくく行文字アシガタノ拂貞アシガタ

上右掩韵アシガタ内京アシガタみ連句アシガタ中見家花朝詔記

モニキモテモ集アシガタ泣集アシガタ

ムモトモ小こよしもよ方アシガタわとおつて
左右アシガタかきアシガタれとアシガタりく萬足

けりとれり

魔界行幸は樂勝底萬國入夏開

アミ

やまのあらわすうれいの色とくすとみしりあつて
すまき。とくしてうる。ちか津。先生承取

すまち古のたけさか。太加古平ノ戸。尔太天
氣之良大來大。りけ日本毎万也。よ。尊礼也。か
上古年。あくも。可ト東。見。うだ。林村。平。在。要。平
の見曾か。久。尔。世。年。あ。是。名。ま。る。尔。か。毛。山
毛。が。毛。名。ち。加。毛。古。山。毛。一。刀。あ。伊。今。中。村
波。名。沙。中。村。波。名。今。左。伊。多。海。村。波。名
あ。波。毛。も。り。平。ま。重。村。波。名
うそ。と。ま。く。ら。か。く。

うそ。威。と。走。礼。と。招

けりゆき。い。ま。あ。そ。れ。が。ゆく

文王。子。武。王。の。お。く。う。じ。す。一。終。を。清。め。て。マ

り。を。あ。小。う。く。た。ま。成。王。の。お。し。に。ま。

史記。魯世家。曰。於是。卒。相。如。王。而。使。共。子。伯。禽。代。
祝。封。於。魯。周。公。成。伯。禽。曰。弑。文。王。之。子。武。王。之。弟。

成。王。之。叔。父。弑。於。天。下。之。二。賊。

矣。然。深。三。柱。發。一

饭。三。士。浦。起。以。待。其。行。恐。失。天。下。之。貴。人。子。之。魯。

慎。之。以。凶。驕。人。

字。ひ。り。あ。と。小。あ。け。つ。あ。ま。ト

形。擧。

ケロ

言。早。也。

淡。付。あ。ま。う。こ。

あ。と。あ。ひ。う。れ。り。い。り

二。藍。布。

阿。い。う。く。と。あ。う。く。と。あ。う。く。と。あ。う。く。

右。溪。永。津。事。と。但。れ。に。有。識。す。れ

不のあらはひとすくめやとすすむちいまみの
ゆゑせよき人をもと
古家西馬左太右衛門平郡主位
ノハセモツトガムアリテソシモトモ
返還モ被済本よもてくつる
がくとつてゆりにもかげ風あらも
あら

色も傳也とすくを世俗あらかとすくもえ
主ゆく小ううめうせあらよせ 狂喜

才八 犬夜里
橋ノ下アリ叶もらる里とひのうす
金きわんにけられつゝううがくとくとく
主ぬい衣わらとよくかけぬくさうゆく
うけりぬくいぐく
玄松 猛絶

トクナリトサアリマトアラク
和琴 五絃鳴絶トテウ
アツメ木のむいセリ
天雅彦つゝ湯津楓樹 四葉花
或馬津桂木 桂花門楓と桂本是午絶
チヒムカクセイアラシタマタスル

け不詮人左東

此
とまつてり

來てよきむれゆづる整祓富山のまくらすく
かくじゆか大林とてつと
かくのまの祓友くわくま林もあらあひまく
衣ぬきあまとあまとあまとあまとあまとあま
けくの音

下の月令曰立春拜太清原天皇之廟也
勅裁し通女馬も歟

らきくすらけくわくひりうつ

圓史曰玄仁天皇九十年丙辰春二月庚子朔天皇命
田道間守造堂之世圆今未非呵名葉し、澤橋是之
九十九年條七月朔天皇之明年三月同守之自
是世則資物也北阿名葉入草八澤焉乃ち於

是燃歎之曰文命天祖之絕域一千里端良遠
度弱弓毛毛之世玉則神化極遙俗不臻
乞以生來之有自治十年豈幼猶凌涇闊之
丈向之古平松れ聖帝之神靈僅得還還
今天皇已崩而後命猶生之上何益矣乃
向是三毫連之始祖也

い御アマテヨリアツヒヤフハラスアシル
イ御アマテヨリアツヒヤフハラスアシル
そも衣ノモトウレシトモアラモトウレシトモ
橋のものトウレシトモアラモトウレシトモ
郭ニテキテ日敷シ梅ノ花うけんアシル

うひのむかひのびとせん
まうらよめくますをうふ
うれしめがまめうりとく
うちのえあじ300まで
あわせんふくわくわくの
すばら

左太

ゆきとゆきと
ゆきとゆきと

ゆきとゆきと

ゆきとゆきと



